

カサインの家は代々占星家であり、大人になると天文台で働く。星占いは国家ソリス・オムネスの趨勢を決めるため権威があり、暮らして困らないが責任は重い。その少年期は専ら知識の吸収に努め、厳しい競争にさらされ、選ばれた少数だけが占星試験を突破できる。カサインはなんとか試験を通過し、夢にまで見た天文台で働いていた。彼は臆病だったが、体の底から湧き出る何かの力があった。それを預ける場所がやっと見つかり、その力のままに生を謳歌できると思った。それは燃え上がる炎のように彼の心を覆って妥協を許さなかった。

しかし所詮夢は夢だった。創られた神話なのだ。汚職、賄賂、欺瞞にまみれた天文台を知り幻滅した彼は仕事への熱意を喪失した。すると炎の対象が別のものに移った。こんなクス底で一生を過ごしたくないという思いが燦ぷり、後世に名を残したいと思った。

その思いを抱いていながらも行動を起こさなかった、いや、出来なかった。結局今の暮らしが楽なのだ。暮らして困ることはなかった。彼は自分の宝石に傷が付くのを恐れた。占星家の証として胸に付けるヒメユリに、父から貰った星の欠片から作った青緑のブローチにもし傷が付けば、あたりは音を立って崩壊し彼は自分の形を失ってしまう。それでも、彼の心は満足を知らず、いつしかそこに影が潜み始めた。影は普段は外に出ないが、ふとした瞬間に自分をさらって頭をもたげて微笑する。彼はいつも俯いていて顔が見えない。他者との和解を拒んでいるようだった。影は知恵を得て楽園を追放された人間に課せられた罰であり、遠い昔人類最初の殺人を引き起こした。彼は傷一つない完璧を求めるが、底辺は脆弱

でちよつとしたことで崩れる。より自分に多くを求めるほど、より繊細になる。

いつもと変わらない日常。同僚たちの声が聞こえる。話題は決まっている。星に関する知識、配属部署、家柄、功績。彼らはいかにも満足げだった。けれど本質的には絶え間ない緊張と戦闘が行なわれていた。人類が植え付けられた優越感の最小公倍数が人の形を借りて現れている。またカサインもそうした欲望の道具だった。一時も休む暇はなく、己の目的を知らず走り回る闘牛のようだった。そして闘牛ほどの生命力も持ち合わせていなかった。会話に主人はおらず、調和はない。訴えかけてくる本物はなく、なんの感動も与えず心の上辺をすり抜ける無意味な流れだった。こうした会話にカサインは辟易して、「もし自分や周りをもっと生物的な愛情や無償の共感を人に与えたり、また与えられたりできればもっと生きやすいだろう」と思い、中庭を見つめた。彼は中庭にある植物が好きだった。そこに行く自分の身が軽くなり、心臓の形が変わる気がした。なぜだろう。植物は自分に価値を強いることがないからだろうか。ともかく彼は中庭が好きでそこは聖域だった。天文台という牢獄の中で唯一のオアシスだった。

毎年冬に、国家総出の一大行事である「星讀祭」が開催されるが、今年もその時期になった。夜空に浮かぶ星の配列を観察し、来年の運勢を占うのだ。星讀みの技術ははじめからあったものではなく、突如濃霧の外からやってきた賢者サリアンブロシウスが伝えたという。後の初代天文台長になる人物であり、占星家の始祖でもある。それ以後ずっと行事は続いているのだが、今年カサインにその役割が与えられた。彼は期待と責任でいっぱい

になった。いくら天文台に失望したといえども、このことだけは依然神聖だった。自らの全存在をもって事に当たろうと野心を燃やした。あたかもその炎で天文台の腐敗を燃やしてみせようとするように。同時に、自分の足元に巢食う影を認識した。火の勢いが増せばそれだけ影も濃くなるものだ。けれども見て見ぬふりをして、震えながら楽しんだ。

「今年の星読みはお前が主役だな。俺もやりたかったけど、決まったもんはしようがねえ、潔く引き下がるよ。認めてやるよ、今はお前のほうが上だつてな」

同じ占星家のベアルが笑いながら言う。夕暮れ時でカサインの影は伸びている。赤黒い天蓋には人を見下すように七つの星が浮かんでいる。ベアルは幼いころからの親友とともに切磋琢磨して育ってきた。まるで双子のようだった。口調は悪いが、根はいいやつでカサインの数少ない友人だ。ベアルは世渡りが上手く、しかも嘘をつかず、誰も敵に回さない術を生まれつき備えているようだった。天性とでも言うのだろうか。そこに、狼が狙った獲物を凝視するように、カサインの影は目をつけていた。

二

星読みの結果は上々、運勢も悪くなかった。宴もたけなわ、皆踊ったり、酒を飲んだりして盛り上がる。

「さすが大占星家アリステラスの息子や。あいつも鼻が高いわ」

千鳥足で近寄ってきた男が言う。カサインは滅多に言われないので一瞬戸惑うが、笑顔を作つて応える。滅多に言われないのは、彼の父がもういないからだ。占星学

校始まって以来最高の天才と称えられたアリステラスは史上最年少で天文台に入り、その後天文台長になった。頭脳と行動力を兼ね備えたまさに万能人だった。しかし「炉心の危機」が発生し、その原因を解明するため、自らキャラバン隊を率いて霧の向こうへ旅立った。カサインが十歳の時だ。そして二度と戻ることはなく、他国から来たキャラバン隊が偶然発見し持ち帰った遺宝と手記だけが遺された。

当時のカサインはそれほど悲しいと思わなかった。もともと多忙を極めるアリステラスは天文台に住んでおり、家に帰ることは滅多になかったので会う機会もなかった。カサインは常に母と共に育った。けれども彼の成長と共に、父の亡霊が鎖のように心臓に絡まり、人生を違う角度から眺めることを強いた。カサインが何かをする度に後ろから視線を感じた。それは批判的で合理的で差別的だった。彼はそれに抗おうとして感情的で博愛的になろうとしたが、ここでは亡霊から逃れられないと気づき、自分に嫌気がして絶望した。彼は父のことを愛していたが、憎んでもいた。しかし本当の父の姿は憶えていない。父に関するすべては遠い記憶である。周りは父がいないことを慮つてあまり彼の名を言うことはなく、カサインも言われて嬉しくはなかった。父の名を聞くたびに心にささくれができた。

三

「伝えるのが億劫だが、結論から言つて君の星読みは間違っていた」

天文台長に呼び出されたカサインはそう告げられた。星讀祭の最中だった。

「まあそう落ち込むな。読み間違いは誰にでもあることだ。今日は皆祭りで盛っているから、明日になって熱が冷めるのを待つてから皆に伝えよう。運勢の結果は多少悪くなるが、大丈夫だ。私が前に立つて一切の責任を負おう。君は安心して明日を待ちたまえ」

カサインは感謝を示し、気丈を装いながら台長室から出た。胸のヒメユリはいつもよりしぼんで見えた。大失敗だった。他のみんなは大して気にしないだろうが、彼の中では一大事だ。今までの人生で大失敗がないわけではないが、大抵は小さなものばかりだ。だから彼はすぐに忘れることができた。だが意識より深い所では忘れていなかった。まるで、今まで抑圧してきた失態が一気に押し寄せてくるように感じた。底辺から頂点まで跡形もなく瓦解した。彼の存在は真つ暗になり、今際の際に立っていた。自分の周りを闇という虚無が覆つていて、その圧力で押し潰された。彼の自我は人に見られることを恐れ、誰にも見つからない場所を探した。前向きに捉えようと、忘れようとしても、なぜか記憶を反復して思い出させる。それは彼を死に追い込むような強迫だった。

彼は街はずれまで我を忘れて歩き、亡者のように倒れこみ、夢の中でか細く燻ぶっている篝火を見た。天空には星がここぞとばかりに憎たらしく輝いている。今にも消えそうな火を掬い上げなんとか灯を絶えささないようにする自分が見えた。次の瞬間、その火が蛙―それは海と陸という異なる領界を行き来できる特権的な生物―に変わり、まだ死ねないという生命の奔流にまかせて精一杯飛び回り、手当たり次第に周りにあるものを食べ始めた所で目が覚めた。彼は無意識のうちにゴミ箱をあさり、食べ物を見つけて食べた。降り積もった雪が水で萎むのを見て、初めて頬を伝う水滴を感じた。雪は彼の体温と

炎の熱を奪い、手足の感覚はなくなってきた。

四

カサインは偶然通りかかったキャラバンに救われた。彼は馬車の揺れで目が覚めた。

「おつ、兄ちゃん起きたか。こんな雪の時に路上で寝るなんて命知らずだな！ どうだ、動けそうか？ あんた天文台から来たんだろう。胸にヒメユリがある。助けたお礼といっちゃあなんだが、遺宝の値段交渉を手伝ってくれないか？」

「い、嫌だ。あそこにはもう戻りたくない。協力して欲しいのなら、僕が交渉に使える文句を教えるから、君たちだけで行ってきてくれないか」

「できれば一緒に来て欲しいんだが、取り敢えず協力してくれるってことだよな。ならそうしよう」

近くの宿に馬車を停めてから天文台に行くので、カサインは宿まで着いていくことにした。また祭りの騒ぎは収まらず、途中、供物を捧げる儀式が見えた。肥えた羊を生贄にして祭壇に乗せ、臓物を取り出し左右に並べていた。祭では、星讀みの結果選ばれて貴いとされた星座と同じ動物を生贄に捧げており、カサインが示したのは牡羊座だった。結局それは違う動物のだが、儀式を行っている人々が知る由もなかった。祭壇の周りでは大勢が手を繋いで踊り、笑いあっていた。彼らの笑い声を心底聞きたくなかった。自分が卑下されているように感じた。

——ああ、でも僕には羊になってお笑い種にされる勇気がなかったんだなあ。

あたりはまだ暗闇だった。

五

「欲を離れ、また欲を離れず。」

この世とあの世を共に離れ、また離れず星々を超えて、楽園へ至れり
全ては虚妄、概念、言葉であると断じて
心静かに観察して、ただ一人歩め」

遺宝に刻まれている言葉の真意は誰にも解らなかつた。遺宝は「星の大災害」と共に現れ世界中に散らばつた。

その災害は星の奥深くまで達し、この惑星の黄金律を全く変えてしまった。今から何千年も前の話だ。

大災害以前、国々は活発に交流し合い世界は一つだった。しかし大災害と共に起きた濃霧で世界は分断され、国々は独りぼっちになった。ただキャラバン隊だけが濃霧を通過する危険を侵して国々を行きかう。彼らは霧の中にある遺宝を発掘し天文台に売ることで暮らしている。各地で見つかった遺宝は星の街ソリス・オムネスに届けられ、天文台で解析される。その秘匿は明かされない。キャラバンは遺宝を見つけて儲け、天文台は遺宝を買い解析し、互いに協力している。

ソリス・オムネスは大災害の後に造られた街で、最も夜空を見通せる場所に建築された。そこには星に魅入られた人々が暮らし、夜空は彼らを祝福するように燦々と輝く。世界で一番、人と星の距離が近いと言っても過言ではないだろう。中央には太虚に高く聳え立つ天文台、その周りを囲むように街があり、さらに外には一面に砂

漠が広がっている。もし初めて星の街に来るなら、人間が無理やり自然を開拓しそこに差し込んだ建物という印象を受けるだろう。天文台には至る所に星の神話や昔話がモチーフの像が配置してある。最も高い塔には、『月明の少年』はこの街で最も親しまれている昔話だ。

あれからカサインはキャラバン隊と行動を共にするようになり、彼らの生業を手伝っていた。隊員の間では、星に詳しいので「博士」とよく呼ばれた。天文台にいる時はキャラバンのことなど何も知らず、知ろうともしなかつたが、彼らにも礼儀作法があり、生を謳歌する権利があると知つた。キャラバンの暮らしは良いものだった。時折、動物を捕まえては皆で火を囲って食べた。ある時はみんなで夜空を見上げて楽しんだ。カサインは星座の解説を頼まれて快く引き受けたが、どうしても天文台のことが思い出されて心が痛んだ。

彼の心はまだ暗闇にいた。占星家でない自分になんの価値があるだろうか。天文台にいない自分を誰が認めるだろうか。生まれてこの方、星の勉強しかしてこなかつた。天文台に入るためにいかに競争に勝つかしか考えてこなかつた。天文台という（コミュニティ）から除外されることを、まるで自分の死のように恐れていた。

——本当は違う生き方をしたい。この先に幸福はあるのだろうか。みんな何の値打ちもないもののために身を削り合っているのではないか。こんなのは間違っている。僕は違う生き方をしたい。

そう思ったが、まわりつく何か彼の生気を奪い無

色透明にした。自分を非難するもう一人の自分を止められなかった。

それでも彼には変化の兆しがあった。大自然への接触が、常に仲間と一緒にいる生活が彼を変え始めた。少年期を知識や競争のために費やさなかった彼らと過すのは心地よかった。

「博士って物知りよね。話して面白いわ。あ、でも物知りだから好きって訳じゃなくて、あなたの独特な雰囲気とか。心配性なところとか。一緒にいて楽しいわ」
隊員の一人が言う。またある時は、

「おい、博士さんよ、そんな端っこに座ってないでこっちに来いよ。あの星はなんて言うんだ？教えてくれよ」と他の隊員。

自分が求められているような感じがして、存在は色彩を取り戻しつつあった。自分だけのあだ名を通して鮮やかな生が流れ込んできた。天文台の重苦しく、希薄な空気に比べたら、今の生活の方がはるかに良い。銜学の帳は上がりつつあった。初めて生きた魂を見た気がして、そして他の血の通った魂と関わることを恐れなくなった。それは第二の生であり、今なら自分に多くを求める性をなくせる気がした。

六

状況が急変するまで長い時間はかからなかった。アリステラスの新たな手記が見つかり、その近くに遺宝も埋まっている可能性が高いらしく、天文台とキャラバン合同で発掘を行うことが決まった。カサインたちは発掘隊の右端に位置しており、隣には天文台のグループがいた。頭上の太陽は強く鈍い光線を放ち、人々の上にのしかか

り彼らの生気を削いだ。陽炎が眼前に広まっていたが、それ以上に極度の灼熱が起す眩暈が視界を暗くした。こうした状況でカサインの意識はぼんやりしていたが、突然の会話で我に返った。隣の天文台の学徒が話しかけてきたのだ。

「いつもこんな暑さの中で作業をしているのですか。ご苦労なこと。我々は天文台から出ることは滅多にないのでね。今日は発掘の手順などいろいろ教えてほしいが、生憎持ち帰った遺宝を炉心に刻印する作業が天文台にはあるのですね。あまり余分なエネルギーは使えない」

彼らの嘲笑を見てカサインは戦を申し込まれたと感じた。これに対して戦いに臨まねばならなかった。太陽に向かつて走っている彼らのすぐ後に影は付いて離れなかった。

「私は最近キャラバンに加わった者で、本当に日々学ぶことが多い。自然の中で過すといつとも違うことを考えるようになる。ここでの生は私にとって甘露だ」
学徒は不機嫌になった。

「じゃあいわゆる生きる意味なんかも考えるのかね。是非ご教授願いたいものだ」
彼らの目は腐っていた。

「キャラバンにももちろん彼らの生の流儀というものがある」
カサインはきっぱり言った。

「やめないか。失礼だぞ。どうして知らない世界のことをすぐバカにするんだ。この街は星の分析だけで成り立っているんじゃないんだぞ」

ベアルだった。自分の気のせいだと思いたかったが間違いない。ベアルだった。ベアルに諭された学徒は、また正義漢の説教がはじまったという感じで、慣れた様子で

適当にあしらった。けれどもベアルの目にも濁りがあった。カサインに気付いていない。初めて会った知らないキャラバン隊員のペルソナを押し付けられた。カサインは怒りを通り越して失望した。

——夜空の星は遠く見通せるのに人は見えないのか。何が彼らの眼を濁らせるのか。ありとあらゆる亡霊が眼を汚すに違いない。何を言っても彼らの心には届かず、心の核に触れる前に幾千万の亡霊がかき消してしまう。彼らは目前の世界を見ずに、星を通して世界を見ることに慣れすぎてしまった。目の前の生きた個人を相手にしている時でさえ、星の下で機能する人間的集合体を相手にしている。

太陽が放つ暗さは増していた。

七

発掘は滞りなく進み、帰路でカサインの隊は手記の一部を運ぶことになった。どうせ天文台に預けるまでの縁だが、手記はカサインの心を乱した。亡霊と共鳴して、色づいた生をまた無色の世界に戻そうとした。その世界では、天文台学徒としての選択は必ず価値があり、常に正しさを保証されているという安心感がある。それは幼子が親の庇護を思わず求めるようなものだ。だが、幼子に付けた首輪は時が経つと当人の首を絞めるようになる。カサインはもう知っていた。

隊員の一人がふと異変に気付いた。先ほどからの暗さで分からなかったが、太陽が霧に隠れ始めている。すると、向こうから発掘隊の一人が取り乱して走ってきた。

「濃霧だ！濃霧が来るぞ！左側は霧に飲まれて壊滅した！」

予報では霧風は来ないと言っていたが、突然霧が動き始めたのだ。カサインの隊は大急ぎで馬車を走らせた。が、間に合わない。霧風が近づいてきた。もうすぐそこまで来ている。カサインは目を瞑って震える手を強く握った。途端に周りの空気が急変したのを感じ、パチパチと音を立てて何かが燃えていた。カサインは恐る恐る目を開くと、その音が自分の体から出ていると分かった。青い斑点が蕁麻疹のように全身に広がり、そのすべての粒から青い炎が出てきた。彼は悶え苦しんだ。それは体の痛覚ではなく、心の、浄化の痛み of せいだった。自分の記憶や意識より深くドス黒い何かが燃えており、自分の存在が無形になるのを悟った。あまりに激しい痛みで、彼は自分の存在も忘れてしまい、自分の名前すら、いや言葉さえも分からなくなった。しかしそれと同時に影も燃えており、次第に小さくなっていった。物心着いてから意識の奥底に巣くっており、何度剥がそうとしてもベツタリとくっついて離れなかった影が。彼は嬉しかった。今にも途切れそうな意識の中で、このまま無垢になって彷徨い続け、生きる意味や野心を放棄するのも良い、と思った。すると突如、遠くに眩い光が現れその光線が、ずっしりと垂れて世界を押し潰すような靄をいくつも貫き、とうとうカサインの前に来た。それは光輪で、智を授ける満月の光に似ていた。